

Sport  
Godzilla®

# スポーツ ゴジラ®

第64号

特集  
スポーツで繋ぐ



無料



スポーツ振興くじ助成事業

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。  
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が  
商標使用の許諾を受け、スポーツネット  
ワークジャパンが発行しています。

2	第64号を発刊するにあたり	長田 渚左
	■特集■ つな 「スポーツで繋ぐ」	
4	アフリカ版甲子園 — 野球で平和をつくる 友成 晋也	構成 山内 亮治
13	“地域密着型プロアスリート”という生き方 浜田 雄介	構成 波多野 圭吾
21	友成氏・浜田氏の2つのスピーチを受けて	菊 幸一
24	「ナンバー」はなぜ続くのか?!	
25	翔んでるテーマ — 1980年代挑戦の時代	松尾 秀助
29	90年代大躍進 — そして「ナンバー」はブランドになった	阿部 雄輔
33	これからも人間を面白いがる — 紙媒体の魅力で	取材・構成 松井 一晃 長田 渚左
38	『走』第11回 子供の心を持ち続けたピカソだけが描いた「走る」絵	玉木 正之
39	夢劇場『馬』No.36「42歳の散華」	長田 渚左
40	バックナンバーのご案内	

南 伸坊 表紙のつぶやき

「今号の表紙イラストは「ベタンクをする人」の絵です。特集は「スポーツで繋ぐ」ですが、つながってるかどうか……」

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>  
バックナンバー第20、40～62号はホームページからもお読みいただけます。

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や  
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

## 第64号を発刊するにあたり

編集長 長田渚左



花の都パリでのオリンピック・パラピピックの熱気と、イスラエルのパレスチナ自治区ガザへの爆撃、さらにロシアとウクライナの戦争が、猛暑の夏に一旦とめになって伝えられた。

一つの小さな惑星である地球の中で、平和と人類調和を目指す祭典と、爆撃から逃げまどう日常が同時進行的に起きている狂状を、もし宇宙人が見ていたら何と思うのか?! と思わず考えた。

国連のオリンピック休戦の決議など、有事には何の役に立たないことをまざまざと見せつけられた。一方でその実効性の無さを嘆きながらも、戦火の中にあっても人々はスポーツに夢を抱き、どこかでスポーツを抛りどころにするのだとも感じた。

そこで今回はスポーツの新たな発想や視点を得る

ために、まずは野球をツールにした「アフリカ甲子園」で、民族の融和を図った友成晋也氏の講演をお届けする。野球というゲームの特性と、アフリカの子どもたちの新鮮なまなざしは、未来への架け橋になる気がする。

そして浜田雄介氏には「地域密着型プロアスリート」という生き方を講演していただいた。勝敗以外のスポーツの本質を伝導することは、これからの社会にとってさらに大切になると感じている。

戦争には政治的、歴史的な背景もある……などと、いう訳知りな言い方、見方をされることもあるが、絶対に肯定などしてなるものか、と思う。

その回避、阻止、防止のためにもスポーツや文化が存在していることを忘れてはならない。

国籍も宗教も肌の色の違いもなく、お互いを尊重し、認め合うためにスポーツはある。特集「スポーツで繋ぐ」で、あらためてスポーツの可能性に気づいていただければ幸いです。

ご協賛およびご協力企業・団体



WOWOW



人と社会を支える力

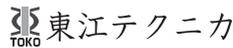
文藝春秋



三井住友海上



株式会社東美物流



(順不同)



特集

スポーツ  
で繋ぐ

# アフリカ版甲子園

—野球で平和をつくる

構成・写真 山内亮治

野球を通じてアフリカと日本の未来を創る——。壮大な活動に取り組むのは一般財団法人アフリカ野球ソフト振興機構（J-ABS）の友成晋也氏。現地でも普及が進み、支持された大きな理由の1つが、競技がもたらす教育的効果の高さだった。効果測定を目的に、今夏には慶應義塾大学と連携し、ガーナで調査研究が行われるなど、活動はさらなる発展を見せている。

（本稿は、2024年7月20日に開催された日本スポーツ学会「第129回スポーツを語り合う会」の講演を再構成したものです）

**友成 晋也**（ともなり・しんや）1964（昭39）年、東京都生まれ。慶應義塾大学在学中は体育会野球部に所属し、卒業後リクルートコスモス社を経て92年にJICA（独立行政法人国際協力機構）に転職。約30年にわたり国際協力事業に従事するなか、8年半アフリカ事務所勤務。自身の野球経験を活かしアフリカで野球の普及活動、野球を通じた人づくりを行う。JICA職員だった2003年、兼業でNPO法人「アフリカ野球友の会」を設立。19年には一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構（J-ABS）へと組織を改め、代表理事に就任した。21年にニュースウィーク誌「世界が尊敬する日本人100」に選出。主な著書に『アフリカと白球』（文芸社）。

一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構（J—ABS）の友成晋也と申します。野球は10歳から始め、区立の中学では都大会、慶應高校では甲子園、さらに慶應大学では早慶戦出場を目指しました。野球一筋49年ですが、私の経歴が他の人と特に異なるのは監督歴です。ガーナとタンザニアで代表チーム、南スーダンで青少年野球団の監督を務めました。アフリカ3か国で野球の監督歴があるのは世界で私だけではないでしょうか。なぜアフリカと縁があるのかというと、30年ほど勤めたJICA（独立行政法人国際協力機構）で先ほど述べた3か国の事務所に勤務していたからなんです。通算で8年半、滞在や訪問を含めると、大陸16か国に足を運びました。

JICAの職員でありながら週末にボランティアで野球を通じた交流を現地の人と行う中、様々な気づきを得ました。最初の赴任地はガーナです。1996年に着任し、3年間代表チームの監督としてオリンピック出場への挑戦を続けました。強化に励ん

だとはいえ、実際のところチームがあまりにも弱かったんです。選手には夢を捨てて欲しくないので真剣な気持ちで「オリンピックを目指そう」と言い続ける傍ら、国内の野球普及を目指しました。多くの子どもが競技に取り組んで育成され、厚い選手層から選ばれるメンバーで代表が構成されなければ出場できるわけがない。そこで当時の教え子たちに2年ほど普及活動をしてもらいました。

そうして私の離任が近づいた99年10月、普及活動の甲斐あってガーナ史上初となる少年・少女野球大会を開催することができました。大会当日に始球式を頼まれていたので会場に行つたところ、野球を楽しむたくさんの子どもたちの中で、あまりに楽しそうだった一人の男の子が近くにいたので声を掛けました。「野球の何が好き？」と尋ねると、「バッターボックス」と答え、理由をこう教えてくれました。「そこに立つと味方全員が僕を応援してくれるし、下手だけどバットに当たるかもしれないから、敵も

注目してくれる。バッターボックスではヒーローになれるんだ。しかも、チャンスがみんなに平等に回ってくる。野球は民主的。だから大好きなんだよ」

この言葉は私にとって衝撃的でした。貧困対策に取り組むJICA職員として、格差をはじめとした彼らを取り巻く社会課題を理解しています。平等とは程遠い状況であっても、野球は平等。この競技ならではの性質が子どもたちにとって大きな喜びであり、新鮮な驚きとして受け止められたようです。この経験を通じて私は、野球には「民主主義を広める力」があると気づきました。そこで、一人でも多くの子どもをバッターボックスに立たせてあげたいと考え、2003年に兼業でNPO法人「アフリカ野球友の会」を設立し、競技の普及活動を始めました。ただ北京オリンピック後に、野球が正式種目から除外されました。これはアフリカの野球人にとって大きな目標がなくなったことを意味します。アフリカの野球が死んでしまう——。そんな悲鳴のような

声がたくさん聞こえてきました。なんとかしなければと打開策を考える中、ヒントになったのは日本の野球の歴史です。日本でそもそも野球が盛んなのは甲子園大会があったからだという考えに辿り着いたんです。じゃあ、アフリカ各国でも甲子園のような大会を作ればいい。ということ、私にとってのアフリカ野球の原点であるガーナを対象に、11年に「ガーナ甲子園プロジェクト」を立ち上げました。

### 成績アップと野球道

全国大会開催の実現にあたり、まず行ったのは競技の普及でした。我々が巡回経費を支援する形で指導者を学校に派遣したんです。プロジェクト開始から1年、巡回指導がきちんと行われているか確認すべく現地へモニタリング調査に行きました。指導の対象校は10校あり、そのうちの1つに足を運んだ際、校長先生が私と対面するや否や「野球をする子は全員、成績が上がるんだよ」と言うんです。「クラス



教えが受け継がれ安全に2列で行われていたキャッチボール  
【写真提供:J-ABS】

のリーダーシップを取るようになり人間的にも成長する」とも。どの学校でも同じことを言われました。日本とは逆ですよね（笑）。この衝撃的な事実の秘密は「指導者」から分かりました。

ガーナ赴任当時、学校では私の教え子が、私からすれば孫のような存在に当たたる小中学生年代の少女を指導していました。そこから10年以上が経ち、今度は20代前半になった彼らが「ひ孫」を指導する状況に変わっていたんです。そんな中で行ったモニ

タリング調査では、キャッチボールを見ただけでなくすごく感動しました。そもそもアフリカで野球を知らない人たちがキャッチボールを始めると、全員がグラウンド中に散らばって色んな方向にボールが飛び交い危ない。ま

た、誰かが暴投しようものなら「暑い中で走らせんな」「ジャンプすれば取れただろ」みたいに、度々喧嘩が起ころ。そんな時に私は、二列に整列してパートナーと距離を取り安全な場所を確保する大前提や、プレー中は失敗を念頭に互いが思いやりを持ちカバーし合う重要性を説きました。私がガーナを去って10年余り、ひ孫たちはそうした教えを守り安全なキャッチボールができていたんです。

練習試合も視察したところ、子どもたちは道具を大切に扱い、整理整頓もできていました。また、試合前には審判の前に選手が二列に並び礼をする姿。これも元々は、日本の「道」の世界として教え子に伝えたことです。こうした所作や礼節の精神が10年以上経つてもちゃんと残っていた。教えが伝播していた事実には深い感動を覚えるとともに、野球が持つ教育的効果の高さを実感しました。そして、これは「ベースボール」ではなく日本の「野球道」だからこそ発揮されるのだという結論に至ったんです。

そんな気づきを得た2012年、私はタンザニアに赴任しました。タンザニアでも野球の指導をするつもりでしたが、誰も野球を知らないし、やっていなかった。しかしこの国ではその後、野球がどんどん国内に広がり、2年後に第1回タンザニア甲子園大会が4校で開始。昨年、第11回大会まで毎年開催され、回を追うごとに出場校も増えていったんです。なぜか。タンザニア赴任当初、最大都市ダルエスサラームにある大きな学校に行き、その校長先生と面談しました。その際に「野球を知っていますか？」と尋ねたところ、返事は「聞いたことあるな」という程度でした。そんなところに「野球やりませんか？」と提案しても「はあ？」としかありませんよね。なので、私は「この学校の目標は何ですか？」と質問してみました。それに対し校長先生は、「そりゃ子どもの成績と進級率の向上だよ」と言うわけです。そこで私は、持参したパソコンでガーナの子どもたちが野球をしている映像を見てもらい、伝え

たんです。「ガーナの学校の先生は誰もが『野球をやると成績が上がる』と仰るんです」と。校長先生は驚き、「だったら、うちの学校にも野球クラブを作ってくれ」と早速依頼されました。そうして始まったのがタンザニアでの野球です。

とはいえ当時、野球はタンザニアでまだ新しいスポーツです。教育的効果を形にするためにも、競技の価値を的確に分かりやすく伝えていく必要があるため、スローガンを設けました。「規律・尊重・正義」。学校の先生たちに、野球はプレーを通じてこれらの価値を学ぶためのスポーツだと伝えました。すると半年後、ある校長先生から「君の言う通りだ。野球をする子はみんな成績が上がり、親が喜んでいて」と言われたんです。しかも、評判を聞いた他校から見学が来るようになったそうで、野球クラブを作る学校が増えていきました。これがどういふことかと言おうと、野球のニーズはなくても子どもを育てたいというニーズは場所を問わずある。それに応えた結

果、競技が国内に普及した。タンザニアでは、野球には「人づくりの力」があると気づきました。

2018年から2年間赴任した南スーダンでは、それまでと違った観点での気づきを得ました。南スーダンは半世紀に及ぶ内戦の末、11年に独立した世界で一番若い国です。独立後も内戦が勃発していたため、野球なんてやっている場合じゃないだろうと思われるかもしれませんが、それでも万が一を考え、赴任に際し野球道具を持って行っただけです。

赴任直後、運良く安全な場所が見つかり、たまたま知り合った3人の若者とキャッチボールを始めました。毎週やるようにしたら次第に人数が増えていきました。一つ気になることが、彼らの表情に笑顔がなく、感情を抑えている気がしたんです。南スーダンでは内戦で400万人以上の難民・避難民が発生したとされており、子どもたちの中にトラウマがあったのかもしれない。そこで、キャッチボールでコミュニケーションを重視しました。「ナイス

ボール」「ナイスキャッチ」、主にこの2つの言葉をどんな時も意識して掛け合うようにしていると、段々と笑顔が増え感情が表に出てきたんです。

その後に南スーダンでも野球チームができ、タンザニアと同じく規律・尊重・正義のスローガンの下、競技の普及を進めました。すると、野球に励む子どもを見た大人たちの間で「すごく生き生きしているし、規律正しい」と評判が広がりました。そこから、野球こそ国の未来を創るスポーツに違いないという考えの下、国内で野球連盟創設の機運が高まり、争っていた民族同士が手を組み野球連盟ができたんです。私は思いました。国の平和を願うのが人々の本音で、子どもたちを正しい未来に向けて育てたい思いは紛争地でさえある。そのための人材を野球で作れると南スーダンの人たちは学んだ。この経験から、野球には「平和を創る力」があると実感しました。「民主主義を広める力」「人づくりの力」「平和を創る力」。これらの力で日本とアフリカの未来を創る



ホームベースの前に整理整頓され並べられていた野球道具  
【写真提供:J-ABS】

というミッションを掲げ、2019年に「アフリカ野球友の会」を財団法人化しJ-ABSへと組織を改めました。我々が実現したいのは、野球の力で「人が育つ」こと、野球の力がアフリカで認められて「競技が広がる」

こと、野球の力が架け橋となり日本とアフリカが「共に成長する」こと。そのために主軸事業として「アフリカ55甲子園プロジェクト」を展開しています。55はアフリカすべての国・地域を合せた数であり、また現役時代にこの背番号をつけた松井秀喜さんに支援していただいています。

事業の大きな目的は、アフリカ各国での野球を通じた人材育成です。現地の社会に創造性や道徳心が育まれた人間力の高い人材が増えることを目標とし

ています。そして、目標達成の手段として我々が普及させているのが「ベースボールリーグ®教育」です。これはベースボールとスポーツマンシップから成る造語で、野球型スポーツを通じて青少年のスポーツマンシップを育むことを指します。

プロジェクトでは競技環境の整備や子どもたちへの目標となる「甲子園大会」の開催を進めますが、ベースボールリーグ®教育の普及がメインの活動です。我々が行っているのは、日本野球の伝統である人づくり。とはいえ、私たち日本の野球人は、野球が当たり前の環境でプレーするため、何を学んだのか、明確に認識していません。暗黙知となっています。アフリカで野球を日本と同じように伝えようとしても伝わらない。なぜ礼をするのかなど、様々な「なぜ」に答えなければいけません。そこで私はアフリカにおける25年の指導経験を通じ、この暗黙知を「形式知」化してきました。日本の野球文化をまったく知らない人にも伝わるよう、アフリカで蓄積さ

れた知識・知見を基に「ベースボールシップ教育55の柱」という教本を作成しています。

### アクションタイム90分と10分

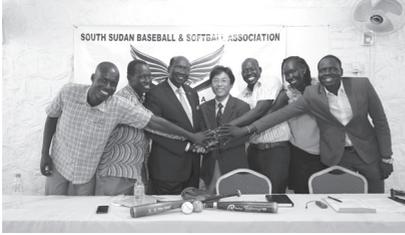
スライドを使い、タイトルが「なぜ」から始まるのが特徴です。具体例として、「なぜ選手たちは時間通りに集まらなければいけないのか」を紹介しましょう。例えば、ガーナでは練習の集合時間を午後3時にしても、ほとんど誰も来ません。3時40分に8割、全員が集まるのは4時です。彼らにとつて3時は3時00分から59分まで。笑い話に聞こえるかもしれませんが、これが「ガーナタイム」と呼ばれる共通認識なんです。私が現地の指導者に選手が時間通りに集まるようどんな努力をしているか訊いても、返ってくる答えは「遅れた選手を鞭で叩く」「集合時間は2時だと嘘をつく」など。どれも本質的な解決策ではありません。

他のスライドに入るところで、私は質問します。

「アフリカで盛んなサッカーと野球の違いは何ですか？」と。「ボールの形」「時間制とインング制」といった違いが答えとして出ます。それでも、絶対に出てこない答えを私は用意しているので話します。

サッカーは試合時間が90分。その間にピッチ上の選手全員が動き回るので、アクションタイムがほぼ90分です。しかし、野球は試合時間が仮に2時間だとして、インプレー、すなわちアクションタイムは合計10分程度。ピッチャーがボールを投げ、アウトかセーフの判定が下った瞬間にその時間は終わります。つまり、野球の本質は直接プレーしていない残りの時間にこそあるんです。アクションしていない間、試合展開や状況、相手選手などのあらゆる情報を瞬時に分析、次に起こり得るプレーを予測し情報をフールドの全員で共有しなければならぬ。

集合時間を守れなかった時、選手は様々な言い訳をします。交通渋滞や道路の冠水、親に用事を頼まれた、野良犬に噛まれた。初めての事態なら仕方が



南スーダンで敵対していた民族同士が手を組み野球連盟が創設された歴史的瞬間【写真提供:J-ABS】

ない。でも、これって野球と同じでどれも情報の分析と予測が可能で、対処できることですよね。3時集合に間に合わせるなら、どんな阻害要件があるか予測し、対策を考え実行する。私の場合、これができる選手は野球が上手くなるんだと言いつつ続けたら、みんな時間を守るようになりました。

では、なぜ我々はアフリカで野球を通じた人材育成の事業をしているのか。アフリカと聞くと、貧困や飢餓といったマイナスのイメージを思い浮かべる

かもしれませんが、実際はIT革命や資源開発などにより経済が著しい成長を遂げ、社会インフラも劇的に進化しています。中間購買層の増加により街にはショッピングモールがたくさん建てられ、物が溢れています。

教育に関しても初等教育の就学率が現在、男子が82%で女子は78%。21世紀に入ってから2割も増加しました。これがアフリカの現状なんです。近未来の2050年でも、日本の人口は9000万人台へと減少し、うち4割が高齢者になると予想されています。一方、アフリカは13億人から25億人へとほぼ倍増。市場が巨大で社会に若い人が多く天然資源も豊富なため、アフリカが世界で大きな存在感を見せる時代が来るのは間違いありません。日本は経済が縮小する以上、この大きな市場へアプローチする必要に迫られるでしょう。それでも、企業関係者からはアフリカに対し「信頼できる人・パートナーがいらない」や「不正が多い」というネガティブな意見が聞かれます。ですから、私たちはベースボールシンプ教育で将来の信頼できるパートナーを作っているわけです。野球というスポーツは今、アフリカの中で光を放っている。野球が日本というブランドを支えていくと私は信じています。



特集

スポーツ  
で繋ぐ

# 地域密着型プロアスリート

## という生き方

構成 波多野圭吾  
写真 山岡亮治

生活の大半を競技に捧げるアスリートが、競技を離れた場でのよう  
に行動すべきなのは、未だ曖昧なままである。  
スポーツ社会学者の浜田雄介氏は、そのヒントを、とある地方で活動  
するプロアスリートの姿に見出し、「競技の世界における評価に左右さ  
れにくい、従来とは異なる特徴的なキャリア」と評する。アスリートの  
主体的・持続的なキャリア形成に必要な「まいつ」とはどのようなもの  
なのか。インタビュー分析の成果をもとにお話しいただいた。

(本稿は、2024年7月20日に開催された日本スポーツ学会  
「第129回スポーツを語り合う会」の講演を再構成したものです)

**浜田 雄介**(はまだ・ゆうすけ) 1981(昭56)年、広島県生まれ。博士(学術)。専門はスポーツ社会学。特に、エンデュランススポーツ(マラソンなどの長時間の苦痛・困難を克服する競技)やアスリートのキャリア形成に関心を持つ。2014年4月~17年3月、九州共立大学スポーツ学部講師。17年4月~21年3月、京都産業大学現代社会学部健康スポーツ社会学科講師。21年4月より同大学准教授。現在に至る。09年、日本レジャー・レクリエーション学会研究奨励賞(論文部門)受賞。著書に『未完のオリンピック〜変わるスポーツと変わらない日本社会』(分担執筆、かもがわ出版、2020年)、『スポーツクラブの社会学―「コートの外」より愛をこめ』の射程』(共著、青弓社、2020年)、『スポーツの「あたりまえ」を疑え!―スポーツへの多面的アプローチ』(分担執筆、晃洋書房、2019年)などがある。

アスリートのキャリアは「競争に勝つこと」が重要であり、競技レベルが上がるほど、結果を出せる者と出せない者で明確な序列が生まれます。

大谷翔平や井上尚弥のように、高次元のプレーをすることで社会的にも経済的にも価値ある存在とみなされる選手もいれば、ただ契約や資格があるだけで、収入はゼロ、みたいなプロ選手も大勢います。また、マイナーな競技だと、いくら技術が高い優秀な選手であつても、そこに経済的な価値を見出してもらえず、十分な収入を得られないことがあります。つまり、競技の世界においてはアスリートが成績や人気などにもとづいて序列化され、その序列の下位に置かれるアスリートは苦しいキャリアを強いられるということですよ。そして、アスリートのこうした苦しいキャリアは、社会全体のなかでも低いところに位置づけられます。

今日これからお話しするA氏は、「地域密着型」プロアスリート」として活動していますが、競技で結

果を出すことによつて賞金やスポンサー料などの報酬を得ているわけではありません。つまり、競技の世界における評価に左右されない、従来のアスリートとは異なるキャリアを送っているんです。

じゃあ、何が彼のキャリアの軸となつているのか。それは、自身が生活の拠点としていられる地域での「A氏にしかできない活動」です。その中身を説明する前に、A氏のこれまでのことを少し紹介します。

A氏は、大学から始めたトライアスロンとデュアスロン（ランニング・バイク・ランニングの3部で構成される種目）で順調に競技成績を残し、大学4年時にデュアスロンで日本チャンピオンに輝きました。23歳以下のアジアデュアスロン選手権優勝の経験もあり、選手としての優れた実績があります。そうやって活躍していくうちに、機材や遠征費などの活動資金をサポートしてくれるスポンサーが現れ、セミプロ選手として活動するようになりました。

しかし、一度そうした立場になれば、今度はスポ

ンサーへ報いるために勝ち続けなければなりません。大会で優勝すれば、次は3位では許されぬ。「これからは、2連覇、3連覇しないと自分の価値を証明できないんだ……」、そう考えたときに無理を感じ、不安な気持ちが大きくなっていったそうです。そして徐々に競技へのモチベーションを失い、大学院修了後は競技から離れ、フリーターになりました。何もすることがない、できることもない、行く当てもない……。そんなふうに、アスリートとして挫折したのです。

## 夢と現実

フリーターとして目標のない生活が続くなか、大学院の指導教員だった先生から、ある高校の教員の仕事を紹介され、地方に移住します。移住後もしばらくは競技から離れていましたが、仕事終わりにふと走ったときに感じた楽しさをきっかけに、ランニングや自転車を再開します。

同時に、彼の移住先には「トライアスロンのすごい人が引越してきたらしい」という噂が広まり、地域対抗の駅伝大会に参加しないかと誘われます。大会に参加するためにはまた違う市に引越す必要がありました。自分がアスリートとして求められたことがすごく嬉しかったそうで、転居を決断し、その土地と住民への愛着を深めていきます。そして「この場所を代表する人間として国体に出たい」と、本格的に競技へ戻りました。

あるとき、自身が勤める学校の授業で生徒に「10年後の夢を描こう」という課題を出すことになりました。その際、A氏は「生徒に夢を持つと言ってくるくせに、自分は教員をそつなくこなしてるだけだな」、「自分は10年後、テレビの有名ドキュメンタリー番組に出演したい!」、「そのためにプロのアスリートになろう!」と思い立ち、すっぱり教員を辞めてしまいました。

プロとして競技の世界へ飛び込むも、教員時代の

安定した収入がなくなり、貯金は半年ほどで半分になりました。そこから地域の人々の支えを得られるようになりデュアスロンの日本チャンピオンに返り咲きますが、そのときに受け取った賞金は7万5000円から税金が引かれた6万7000円。A氏はこの金額を見て、「意味ねえ、価値ねえな」と思ったそうです。「結果＝価値」という従来型アスリートの方程式に当てはめれば、優勝を上回る結果はなく、今後も勝ち続けていくしかない。でも、自分は今もう、そんなに勝ちたいとも思わない……。それでデュアスロンには区切りをつけ、競技の第一線から退いていきます。

### ペダルを漕いでかき氷

それからのA氏は、競技の世界にとらわれることなく、より幅広い意味での「身体を動かす」ことで生計を立てています。まずは、山のなかで長距離を走るトレイルランニングやマスターズ陸上などの大

会出場。ただし、A氏はどれも日本のトップで競おうとしているわけではありません。自分自身や地域の記録に挑戦することがテーマになっています。

SNSにも力を入れていて、丸一日デュアスロンを続けたり、300kmの道のりを自転車ですべしたり、地域の名山を登ったり、といった様子を発信しています。

そのほかには、Tシャツやカレンダーなどのオリジナルグッズの販売、地域イベントへの出演などがあります。地域のお祭りでは、かき氷機と自転車をチェーンでつなぎ、ペダルを漕いでかき氷を作ったそうです。これがすごく盛り上がるらしいんですね。こんなふうには色々なイベントの盛り上げ役を務めたり、イベントそのものの監修をしたりしています。

また、地域からの様々な依頼にも応えています。たとえばA氏の住んでいる市には過疎地域があり、そこには新聞を配れる若い人がいません。それを聞いたA氏は、だったら自分がやろうと、トレーニン

グを兼ねてランニングしながら配達するようになり  
ました。ほかに、県内の小学校などでかけっこ教  
室の講師を務めたり、自治体の地域振興の一環とし  
てサイクリスト向けに地域の坂道を調査したりもし  
ています。

### 「舞台」から「橋」への転換

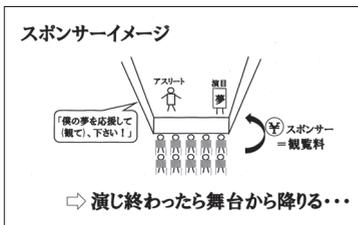
一方で、A氏のこうした活動をスポンサーとして  
支援する人たちがいます。でも、おそらく皆さんが  
疑問に感じるのは、何でこういう活動がプロとして  
成立するのか、何でこれが応援され、支援されるの  
か、という点だと思えます。

スポンサーといっても、A氏はオリンピックに出  
場する選手のような、強い影響力や広告的価値を持  
つわけではありません。ですから、A氏を経済的に  
支援することでスポンサーをしている企業の認知が  
高まったり、商品の売上が伸びたりするわけではあ  
りません。そういう従来の枠に収まり切らない非典

型的な関係性がA氏とスポンサーの間には見出せま  
す。

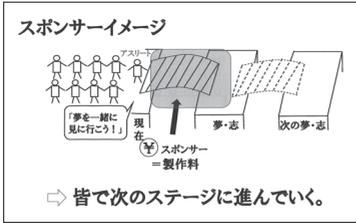
A氏は、アスリートを「競技という舞台の上で  
『夢』という演目を踊る人」と説明しています。舞  
台の下には、観覧料を支払って席に座るスポンサー  
がいる。アスリートは舞台の上で自らをアピールし、  
踊りが終わったら舞台から降りなければならぬ。

観ている人は「楽しかった、お疲れさま」と言って  
帰ってしまう。そこで両者の関係は終わりです。舞  
台も、演目も、観覧席の椅子も、ずっと一緒。同じ



新しいアスリートとスポンサーのイメージ  
(A氏作成・浜田氏提供)

ことが延々と繰り返され  
ていく。でも、これはきつ  
と長続きしない、ここから  
脱却しないといけない、彼  
はそんなふうには競技の世  
界を見ていたわけです。  
そうとはいえ、A氏も当  
初はスポンサーにSNS



従来型のアスリートとスポンサー  
(A氏作成・浜田氏提供)

「夢の実現」という目的地にたどり着くためには、橋を作って川を渡る必要がある。その橋を作るために必要な費用を、スポンサーと

のフォロワー数や広告閲覧数などを説明していました。でもあるとき、スポンサーに「広告の視聴数とかそういうことじゃなくて、俺はAを見て元気をももらっている。Aにもらった元気で仕事を頑張ろうって思えるから、そこをずっと大事にして欲しい」と言われ、ハツとします。

して支援してもらおう。そんなふうに向かつて努力する人や応援してくれる人が、常に同じ目線で、近い距離感で支え合っている。そういう関係をアスリートは築いていかなければならないんだ」と、考えるようになったといいます。

それからのA氏は、地域の人のことを知る努力を始めました。農家さんであれば、農作物のことを勉強して、一緒に収穫や販売を行い、苦楽を分かち合う。彼自身が、周囲のことを理解し、応援するようになったんです。そうすると、今度は地域の人が「A氏のことをもつと知りたい、支援したい」となってくる。A氏の存在に価値を感じてくれる人が増えていき、応援と支援が循環するようになったんです。

今、彼が標榜しているのは、「存在＝価値」という考え方です。A氏を見て「今日もあいつ走っているな。ああ、自分も頑張ろう」と感じる、そういう応援と支援の循環のなかにある、お金の代えられない

「これからは、舞台の上で踊っているんじゃないくて、自ら舞台を降りて、観覧席の人と同じ目線でアクションを起こさないといけない。自分と支援者は、同じ夢や目標を持つ同志で、それぞれに手を取り合ったり刺激しあったりしながら、その実現に向けて一緒に努力していく。ただし、『夢の実現』という目的地

う。彼自身が、周囲のことを理解し、応援するようになったんです。そうすると、今度は地域の人が

い価値が彼のプロ活動の軸になっているし、根幹を支えているんです。

### 贈与の次元で「枝葉を増やす」

ここまでの内容を、理論的に整理してみます。

まず、「結果⇨価値」という考え方には、同じ価値・価格が交換される等価交換の関係を見出せます。労働者が、労働成果に見合う対価として、給料を受け取る構図と同じですね。この構図では、労働者はあくまで労働力であり、人としての固有性や特異性は考慮されません。ですから、労働者を雇う側は「同じ成果が出せる人であれば誰でもいい」と考えます。

これをA氏に当てはめてみると、彼は大学院の頃、スポンサーの支援額に見合った活躍ができなくなり、契約が更新されずフリーターになりました。スポンサーの視点で考えれば、契約選手が支援に見合う結果を出せなくなったら、その契約を打ち切り、同じ

ような価値があつて見返りが期待できる別の選手と、新たに契約を結ばないわけです。あるいは、支援すること自体に価値がないと判断すれば、誰とも契約しなければいい。アスリートとスポンサー間の等価交換は、アスリートの能力や人気などにもとづいて支援額が決まり、その金額に相応しい活躍ができなくなれば、関係が途絶えてしまいます。

次に、「存在⇨価値」という考え方ですが、これは贈与的なふるまいとして理解できます。何かをしてあげる、された側はお返しをする、という構図だけみれば交換に似たような関係なんだけど、贈与は交換と違って見返りを前提にした行動ではありません。何かをしてあげたくて相手に働きかけているのであつて、事前にお返しを期待しているわけではない。働きかけられた側も、してもらったことに対してお返しをしただけで、それに対する新たな見返りは期待していません。お互いがそれぞれの気持ちに従って何かを贈り合い、支え合っている。そして、

働きかける対象が、別の誰かに置き換えられない固有性を有しているという点に、贈与と交換の根本的な違いがあるのです。

A氏は、多くのアスリートがとどまっている舞台から降り、地域に「元気を与える」活動をしていきます。それに対し、周囲の人々は「元気をもらったから、A氏を応援したい」と応えています。ある支援者は、A氏の「熱いところ」に「惚れた」と話している、「だから純粋に応援したい」と語ります。こうした発言から、A氏を支援する人たちは必ずしも等価な見返りを期待していません。A氏がアスリートとして競技でどれくらいの結果を出すか、どれだけだけの広告的価値があるか、といったことは気にしていないわけです。A氏も今の状況は「ラッキーの重なり」だと認識していて、地域の人たちから必ず見返りが得られると考えているわけではありません。しかしこうした偶然性を含む贈与的な関わりからかけがえのない価値が生まれれば、競

技の世界における評価に左右されないアスリートと支援者の関係性が長く続いていきます。

これらをまとめると、アスリートは普遍的・一般的な価値交換ではなく、「身近なこの人だからこそ」という固有性のある価値に根ざせたとき、そのキャリアがスポーツの競争原理の外に開かれ、新たな可能性が生じていくといえるでしょう。

特に、専門性が高まる大学生年代以降のアスリートは、競技への専心を求める傾向にあります。また、周囲からそれを求められることが多いという実状もありますから、そのなかでいかに贈与的な次元にキャリアの軸を寄せられるかが重要です。「この人だからこそ」という他に置き換えられない固有の関係が築けるよう、A氏の表現を借りれば自分の可能性の「枝葉を増やす」活動をできるようにすることが、アスリートの主体的・持続的なキャリア形成を実現するうえで大切だと考えられます。

# 友成氏・浜田氏の

## 2つのスピーチを受けて



国土舘大学大学院特任教授  
菊 幸一

まず友成さんのお話ですが、ヨーロッパの前近代のやんちゃで暴力的なスポーツが、ルールが整えられていつて今に至る過程をアフリカの地でリアルに体現している印象でした。

友成さんがおやりになつてゐるのは野球で、そこに基軸としてあるベースボールシップ®という考え方や哲学は、ヨーロッパではスポーツマンシップ、スポーツパーソンシップと言われるものです。

その根底にある民主主義、人づくり、平和の3本柱はヨーロッパのスポーツを支える考え方とまったく同じです。だからこそ、クーベルタンはオリンピックをやるうとしました。前近代の暴力的なスポーツではともかく相手を倒せばいいわけで、決着

をつけるためなら相手を殺してもいいという考えでした。つまり決闘でした。その後の近代スポーツはルールをつくり、時間をかけるものになります。勝ったり、負けたりしながらゲームを続けることに意味がある。

### 時間と学び

例えば英国発祥のクリケットやゴルフなども、勝ったり負けたりを1カ月、2カ月続ける。シーズンスポーツといわれるものは今も長い時間をかけていて野球では百何十試合もする。いわばレジャーです。勝ったり負けたりしていく過程で、人は学びます。プロセスの中で相手を学び、自分のことを学び、

人づくりを学ぶ。また相手にケガをさせて相手がなくなつては試合ができないわけで、相手を尊重し、自分も相手から尊重される立場でないと続かない。自分の尊厳を相手の尊重に委ねる。だから試合前に整列して「お願いします」と敬意を表する。そこには、とても重要な意味が込められています。

## 防御と先手

友成さんがやっていらつしやる活動は、ヨーロッパの近代スポーツの発生のエッセンスを野球に託しての展開です。つまりそれは、アフリカの国々の近代化に関係しています。国が独立してゆく長い歴史のプロセスにおいて近代国家を形成する必要な人間関係を、スポーツから学んでいる。近代スポーツは近代的なライフスタイルを形成し、近代社会をパラレルに構成する。これと同じ要素を持つていると感じました。但し、一つ危惧することがあります。お話の中にバッターボックスに入るのが好きなんだと

いう少年の話がありました。皆が自分に注目してくれて、応援してくれて、うれしいという気持ちは、勝つたり負けたりするスポーツの醍醐味だいごみやプロセスの中で生じますが、それがやがてエスタブリッシュメントされてゆくと、スポーツは結果に偏重して初めの主旨から離れてゆく。例えば、勝てばいいんだ、結果さえ良ければいいんだ……というように。いわゆる勝利至上主義にアフリカでも陥るのではないか？ それについての防御、友成さんはどんな先手を打つてゆくのだろうか？ と思いました。

## 二つの優勝

友成 とても鋭い指摘で、実は私も以前から大会でその点に危惧を覚えていました。だからケニアやタンザニアで甲子園大会などを開く上で、二つの優勝を目指そうと話します。一つは大会の優勝、もう一つは昨日の自分に対しての勝利、成長を目指すという賞です。ベースボーラーシップア

ワード（賞）はエデュケーション・コミッテীরのメンバーや審判員たちが規律、尊重、正義などの視点で全試合を細かく採点してアワードの授与を決めます。実は試合の優勝よりもアワードの方が賞品も良いのです（笑い）。だからその価値は高いと子どもたちは感じているように思います。

### プロ・アスリートと社会的価値

もう一つ気になるのはさまざまなメディアがスポーツの勝敗しか報道しない昨今です。スポーツの教育的価値というものもしつかり示していく必要を感じます。東京五輪のスケートボードの選手が勝ち負けだけでなく、難しい技に挑戦することで互いを讃え合う様子は見る側にも共感を呼びました。勝つことだけがテーマではないことを見事に示した。それは浜田さんの発表にも共通すると思います。日本のスポーツはアマチュアスポーツから発展しました。今はプロ・スポーツというと、等価交換の原理

でみられています。スポーツを金に換える商売人というイメージ。プロ・スポーツとは何なのかを基本的に議論してこなかった、そんな社会に應える、社会課題がスポーツにはあるわけで、それはスポーツ全般に言えますが、プロ・アスリートは特に（その課題解決への重要な）意味を持つことになります。今回の事例には地域、コミュニティとの関わりが出てきました。地域の人のいわゆるパトロンの感覚で一口でも二口でも、あの人を応援したいという気持ちをお大切に、また地域の欲求にも応えてゆくプロ・アスリートの姿です。アスリートという単語をよく使うようになりましたが、この言葉に込められたコンセプトには従来の経済的な等価交換の原理（経済資本）に代わる、さまざまな社会性（社会資本、ソーシャルキャピタル）を支える贈与の重要性という意味合いが含まれているように思います。

ナンバー ☆エバート「恋の自伝」、そして「結婚」大特集

# Sports Graphic Number

Sports Illustrated 増刊誌

350yen

58

5月20日の2日発行

9/5



話題の自伝・独占掲載

そして、スポーツ界100人の

## 「結婚・離婚・再婚」

松尾秀助氏が選ぶ  
1980年代の一冊58号

# Sports Graphic Number

「スポーツグラフィック

ナンバー」

124

520

5月21日発行

432



adidas フランスW杯  
出場決定

# We did it!

日本代表最終予選完全詳報。

緊急速報

日本vs.イラン

【世界トヨタピクト

中田英寿と川口能活  
の63日。

【保存版

激闘全8戦

プレイバック。

阿部雄輔氏が選ぶ  
1990年代の一冊432号



特集

## スポーツ で繋ぐ

# 「ナンバー」はなぜ続くのか?!

文藝春秋のスポーツ総合誌「ナンバー」の創刊は1980年4月。その後、「ナンバー」の成功を追っていくつかの雑誌が創刊したが、現在それらは休刊・廃刊、あるいは紙の定期刊行物としては姿を消している。なぜ「ナンバー」は生き残ったのか。80年代から今日までの編集長3人が、それぞれの時代のスポーツと「ナンバー」を語る。

「ナンバー」はなぜ続くのか?!

# 翔んでるテーマ

## ——1980年代挑戦の時代



松尾 秀助(まつおひですけ) 1933年(昭和14)年、東京都生まれ。東京大学バレーボール部卒業。63年文藝春秋入社。「週刊文春」「文藝春秋」など雑誌畑を歩き、80年「ナンバー」創刊に携わる。95年文藝春秋退社。以後フリーとして文筆活動。

最新号の「ナンバー」を開いてみる。美しい。写真は99%キチンと四角形で、規矩きく正しい。文章もほぼ四段組み。食い込みや写真にかぶせた白抜きも少ない。タイトルもマジメ。奇を衒てつたり、おちゃらけたりしない。

一方、1980年創刊号からの「ナンバー」を見返してみた。なんたるゴチャマゼ感! 大胆な、大胆過ぎるデザインに満ちている。とくにコラムのグジャグジャさは凄い。写真、イラスト、マンガをミキサーにかけて隙間に文章を埋め込んだ感じ。だいたい紙質が今と違って三種類。カラー、モノクロ、ガラ紙。今より活字が小さくて、私のような高齢者には読めないし、読もうという意欲も削ぐ。

とにかく文章量が多い。活字雑誌ばかり作ってきた文春育ちの編集者は、文章を削ることを嫌う。一方、ビジュアル誌と銘打っている以上、写真も捨てる。したがって、写真の上に文字を被せる。読み辛い。両方を殺しているようなものだ。そのかわり情報量はもの凄く多い。当時、「ナンバー」は野球ばかりやってつまらん」という読者投稿が少なかつたが、よく数えれば毎号数十種類のスポーツ種目を登場させている。マイナー・スポーツもニュー・スポーツも扱っているし、プロやスター選手だけでなくシロウトも載っている。とくに美女がらみが多いのだが……。

こうした「ナンバー」草創期の姿は、その成り立

ちから来ている。私は「仮目次づくり」という遊びが好きだった。当時、「週刊文春」編集部などにいて忙しかったが、こんな特集、あんなコラム、〇〇にインタビュ、インタビュアーは△△、ビジュアルは似顔マンガで——などと、勝手に妄想して書き出しては横に長く繋いだ「目次」に仕立て、座興ざきょうでみんなに披露する。そんな遊びだ。

## 七人のサムライ

とくにスポーツが好きだったし、アメリカのスポーツ週刊誌「スポーツ・イラストレイテッド」を丸善あたりで買って、パラパラ読んでいた。その素晴らしい写真やイラストレーションの使い方に魅了された。たまたま一年間休職してアメリカに留学する機会があり、ニューヨークのタイム・ライフ社にある「スポ・イラ」編集部に顔を出したりしていた。

帰国すると、文春社内にも新雑誌創刊の機運があり、私が回覧していたスポーツ誌の仮目次が運よく

お取り上げになった。大正、昭和初期にあった「アサヒスポーツ」以来のスポーツ総合雑誌ということ業界で評判になり、岡崎満義編集長以下、七人のサムライで創刊に漕ぎつけたのが1980年4月。スポーツを勝ち負け、記録だけにとどまらず衣食住、冠婚葬祭、喜怒哀楽、人生の種々相から始めて取り上げようというコンセプトでスタートした。

しかし、いざ始めてみると、「ナンバー」づくりは難しかった。創刊号から「ナンバー9」までを見ると、気負い、迷い、試行錯誤がはつきり見える。文春始まって以来のグラフィック誌ということで、思い切って雑誌未経験のアートディレクターを起用したため、大胆で新鮮な発想のデザインも多かったが、整理されないままのページも多く、それがゴチャゴチャ感につながる。それも面白い、と当時は思っていた。

「ナンバー10」の長嶋茂雄（当時最下位の巨人軍監督）にラブコールを送った号が超大ヒットになり、

「ナンバー」はなぜ続くのか?!

初めて世間に「ナンバー」の存在を知らしめたといえる。その大成功テーマの系譜は江川、力道山、北の湖などを表紙にした人物深掘り特集として受け継がれた。

### 売上最低部数を記録

その他のテーマの取り方も大胆で、53号「スポーツは胃袋に始まる」は人気者の朝夕「あさしお大ちゃん」が特大の鯛を抱えて齧る姿を表紙にし、アスリートにとつて食事がいかに大切かを特集した。58号「結婚・離婚・再婚」はスポーツ界100人にとつての結婚観をインタビュー。また離婚経験者からその理由を訊き出し、再婚して成績が急上昇した例なども取り上げた。傑作なのは「スポーツ選手のセックス戦記」と題した一文で、元阪神投手の江本孟紀が登板日とセックス日のカレンダーを細かく教えてくれ、性科学者たちが様々なセックスにおけるカロリー消費量を計算してアドバイスを述べている。そ

れに合わせるビジュアルが本くに子というほんわかイラストレーターの可愛らしい裸婦というのも抜群の取り合わせと言える。「結婚」というテーマは「ナンバー181」（1987年）でも特集を組み、長嶋王をはじめ多数の結婚写真を掲載している。これらの号は「ナンバー」本来の面白さを發揮して、よく売れた。

スポーツ新聞大研究、テレビとスポーツ、スポーツマンガなども、らしいテーマだ。もつとも、67号の「スポーツ世界に神はあるか」は、いわゆるジंकス、占い、オカルト噺などを満載したが、読者からはソッポを向かれて、当時の売上最低部数を記録した。

80年代前半は野球がほとんど唯一の売れ筋種目だった。それも巨人（長嶋、王）、阪神、今はなき西鉄ライオンズくらいが売れるテーマだった。創刊当時は売れる、売れないはともかく、できるだけ「ナンバー」の守備範囲を広げるために、無理やり

「翔んでるテーマ」に挑戦しようとしていたキライがある。

80年代後半になると、デザインも社内デザイン室が担当し、あまり突飛なレイアウトはなくなつた。売れ筋も野球人気がかつてほど高くなく、代わつてラグビー（早明戦が大人気）やF1などのモータースポーツ（中嶋悟、セナ、ピケら）が上昇機運になつていった。

当時は執筆陣も多彩で、村上春樹、井上ひさし、椎名誠、向田邦子、丸谷才一などという文壇名士や、ミュージシャン、アーティストなどが健筆をふるう。蛭子能収、高橋春男のマンガが誌面をゴチャマゼにして面白いし、浅井慎平、水谷章人ら第一線カメラマンが写真の面白さを大胆に表現してくれた。

### 自由に発展、愉快なポーズ

これは時代もあるのかもしれないが、当時は野球にしる大相撲にしる、アスリートたちが面白がつて

積極的に参加してくれたし、奥さんや家族、ガールフレンドたちがカメラに向かって愉快なポーズをとつてくれた。

「ナンバー」編集部は10人足らずの少数精鋭だったが、周辺に多くのライターや編集プロダクションが居り、また瀧安治さん、星野仙一さんが編集協力者として、その広い人脈を活かしてくれた。後には山田久志さん、山下大輔さんらも参加して、他誌には真似のできない企画が可能になつた。

今の「ナンバー」が姿勢正しい優等生なら、草創期の「ナンバー」は駄々っ子悪童といった格好だ。思えば80年代はバブルもあつて日本人は元気だったし、雑誌出版界も自由で発展的だった。金のかかる「ナンバー」はなかなか黒字基調にならなかつたが、読み返してみると結構面白い。現役「ナンバー」編集部の諸君はお忙しかろうが、ときにこの時代のページを繰つて、苦笑したり、あきれたりしてみたいかがだろうか。

「ナンバー」はなぜ続くのか?!

# 90年代大躍進

——そして「ナンバー」はブランドになった



**阿部 雄輔**（あべ・ゆうすけ）1958（昭和33）年、東京都生まれ。81年文藝春秋入社。84〜86年「ナンバー」編集部。87〜97年広告局で「ナンバー」を担当。97〜03年「ナンバー」編集部。01〜03年は編集長を務める。19年文藝春秋退社。

「ナンバー」にとって1990年代は躍進の10年だった。販売部数、広告収入ともに右肩上がり。IFAWワールドカップフランス大会出場32チーム決定を報じた432号（97年12月4日発売）は実売47万5000部で、今も破られない最高記録である。広告収入はさらに増え続け、2002年のワールドカップ日韓大会でピークを迎える。

「ナンバー」の通常号は1980年4月の創刊から94年1月までは月2回（原則5日、20日）刊で、年間24冊。その中である程度の部数を見込める特集は80年代前半はプロ野球、80年代後半からF1、それに冬のラグビー、夏の鈴鹿8耐、甲子園あたりを加えても24冊には足りなかつ

た。隙間はあの手この手の企画で埋めるのだが、前項松尾秀助さん（82〜84年編集長）の回想にあるように、自由に冒険できる楽しさはあったものの部数は安定しなかった。たびたび表紙を飾るアイコンのようなアスリートも、長嶋茂雄、中嶋悟、アイルトン・セナぐらいだった。

それが90年代になると、競馬、ヘビー級ボクシング、NBA、Jリーグと海外サッカー、メジャーリーグ、総合格闘技などの特集が加わり、年間を通して安定したラインアップが組めるようになった。武豊（89年から）、マイク・タイソン、マイケル・ジョーダン、三浦知良、野茂英雄、イチロー、中田英寿など新しいアイコンが続々と登場する。

## 躍進の時代背景

きっかけは衛星放送の本格化だった。90年代、NHK・BSのメジャーリーグ、WOWOWのボクシング、スカパー！のNBAなどスポーツを目的に衛星放送を視聴し始めた「スポーツゴジラ」の読者も多いのではないか。それが世界中で、ほぼ同時期に起こっていたことである。言語や文化、イデオロギーの壁を越えて面白さが伝わるスポーツは、衛星放送普及の尖兵、キラーコンテンツだった。当然のことながら放送権料は爆騰した。

さらに大きく風呂敷を広げれば、89年のベルリンの壁崩壊から91年のソビエト連邦崩壊に至る東欧の民主化などもその背景にあつた。スポーツビジネスのマーケットは旧西側諸国にとどまらず全地球規模に広がった。北朝鮮の金正日総書記がエア・ジョーダンを買って漁る時代がやってきたのである（本当かどうか知りませんよ）。

スタジアムやユニフォームの広告料、選手の年俵や広告出演料なども高騰し、人気球団は投資対象にもなった。IOC（国際オリンピック委員会）やUEFA（欧州サッカー連盟）にはそれまでとは比べものにならない巨額の金が流れ込んだ。

放送コンテンツとしての魅力を高めてビジネスをさらに拡大するために、各競技団体はルールや競技体系の見直しを進めた。IOCは92年を最後に夏季・冬季大会の同年開催を改め、夏季大会と冬季大会を2年おきに行なうことにした。ヨーロッパチャンピオンズカップ（現UEFAチャンピオンズリーグ）は長らく各国リーグのチャンピオン（優勝クラブ）によるトーナメントだったが、97/98シーズンからUEFAランキング上位国の2位以下のクラブにも出場権が与えられるようになり、いまや同国のクラブ同士で決勝が行われることも珍しくない。

国際スケート連盟（ISU）は90年世界選手権を最後にテレビ映えのしないフィギュアスケートの規

「ナンバー」はなぜ続くのか?!

定演技（コンパルソリー）を廃止した。氷上に正確な図形（フィギュア）を描く技を競うことから名づけられたフィギュアスケートという競技の本質にかかわる変更だった。95/96シーズンから主要6大会をシリーズ化（現グランプリシリーズ）し、シリーズ上位選手による決勝大会（現グランプリファイナル）を創設。同大会は世界選手権をしのぐほどの人気コンテントになった。

ドーピングや八百長、フリーガン対策に真剣に取り組むようになったこと、世界ランキングや標準記録などを明確にして競技会への参加資格の公正化を進めたこともこれらの潮流と無縁ではない。清潔、明朗、健康な世界であつてこそ、スポンサーや投資家は安心して金を注ぎ込むことができる。スポーツがグローバルなビジネスになり、世界中の面白い競技、魅力的なアスリートがあまねく世界中で見られるようになったのが90年代で、「ナンバー」はこの流れを上手にすくい上げた。

### 面白いことをカッ「良く

89年から94年に編集長を務めた設楽敦生さん（故人）の口癖は、「面白いことやろうぜ。カッコ良い雑誌つくろうぜ」だった。雑誌をつくる者として面白さをとことん追求するのは当たり前だが、「ナンバー」は面白さと同じ熱量でカッコ良さを追求した。

80年代後半から「ナンバー」のアートディレクション、デザインは文藝春秋デザイン部が担っていた。デザイン部、さらに文藝春秋写真部も「ナンバー」編集部と同じフロアにあつて、深夜まで気兼ねなく打ち合わせができた。仕事場が隣り合わせでお互いをよく理解し合っていたこと、編集部とデザイン部、写真部の密なコミュニケーションが90年代の躍進を支えた。

雑誌づくりの体制も徐々に整備された。「ナンバー」の製本はいわゆる「中綴じ」で、80年代はセ

ンターフールドにカラーグラビア、その外側にモノクロザラ紙の連載記事、その外側にモノクログラビア、一番外側がカラーグラビアというフォーマットだった。それが90年6月からオールカラーページとなり、記事編成の自由度が格段に増した。94年2月にはそれまでの月2回刊から隔週（原則木曜日）刊に変更。同時に一部のページの校了を発売3日前の月曜日まで延ばすことが可能になり、土日のイベントの掲載が可能になった。97年11月16日、日本代表がFIFAワールドカップ初出場を決めた「ジョホールバルの歓喜」は日曜深夜の出来事だったが、「ナンバー」は4日後の11月20日発売の432号で速報し、41万部（返品率1・8%）を売り上げた。

90年代末には雑誌づくり以外にも手を広げ始めた。たとえば写真展を中心としたイベント開催（98年には東京・銀座ソニービルと大阪・心斎橋ソニータワー、99年には同じ2カ所と大阪ならばCIITY

で）、鞆の青木、アパレルの三菱レイオンに「ナンバー」ロゴマーク入りのカジュアルバッグ、ウェアの生産・販売をライセンス、BS朝日制作のスポーツドキュメンタリー番組「スポーツの世紀」の企画協力などで、「ナンバー企画部」という部署を設けて、編集者2名が兼任で担当した。案件の多くは他の企業からの申し出によるもので、スポーツ周辺で新規ビジネスを目論む企業にとって、「ナンバー」は是非ともコラボレーションしたい優良ブランドに育っていた。

SNSもサブスクもスマートフォンもないこの時代、競技の情報、試合の詳細、選手の肉声などを発信・受信するプラットフォームは、まだテレビ、新聞、雑誌などの既存メディアが独占していた。振り返れば90年代は雑誌の黄金時代、それもおそらく最後の黄金時代で、その中で最も成功した雑誌のひとつが「ナンバー」だったという評価は、身内褒めに過ぎるだろうか。

「ナンバー」はなぜ続くのか?!



これからも人間を面白がる

紙媒体の魅力で



**松井 一晃**（まつい いかずあき）1969（昭和44）年、大阪府生まれ。慶應義塾大学卒業後、92年文藝春秋入社。2012年から「ナンバー」編集長、18年から文藝春秋編集長を務め、21年ナンバー局長就任。24年より執行役員を務めている。

——現在ナンバー局長、雑誌「ナンバー」の発行人です。入社は1992年。文藝春秋で「ナンバー」編集部への配属希望者が圧倒的に多かった頃でしょうか……。

**松井** その通りです。採用面接の段階から、いつも「ナンバー」編集部へ行きたいと言いつつ、なんともかみぐり込みました。実際に配属後、「ナンバー、ナンバー」って言うてる人は逆に配属してもらえないという都市伝説聞いたものを聞いて「ラッキーだった」と思いましたね。編集者という仕事のスタートの2年を、

設楽敦生編集長（故人）の元で過ごせたことが今の礎になっています。

### 面白い、かつ良い雑誌

——なぜそんなに強い思い入れを。

**松井** 高校の図書館で「ナンバー」と出会ってからずっと愛読していました。スポーツをこんな風に取り上げる雑誌があるんだと図書館でむさぼるように読んだのを覚えています。就活時期はバブルの最後ぐらいですので、漠然と新聞社に行きたいと考えていましたが、「ナンバー」を刊行している文藝春秋から内定をもらったので、もう他はいい……と思っ  
てしまいました。

設楽編集長は細かいことを言う人ではなくて「面白いことやろう、かつ良い雑誌つくろうぜ」が口癖で、今日から編集に携わるペーパーだろうとベテランだろうと誌面やプランの前では平等。意見を言わないのはダメという雰囲気、人に負けないかつ

良いものを……という空気がみなぎっていました。

4月に「ナンバー」に配属されて、5月中旬に刊行されたダービー直前号が初めての仕事でした。毎日毎日一生懸命で、校了まで記憶がないくらい走り回っていた覚えがあります。

### 人間を面白がる精神

——90年代に「ナンバー」は飛躍して、FIFAワールドカップフランス大会出場32チーム決定を報じた432号が実売47万5000部という最高記録をつくりました。松井さんは90年代後半には「週刊文春」「月刊文藝春秋」へ異動し、01年にデスクとして「ナンバー」に戻られました。サッカーがらみで他社が次々と新たな雑誌を刊行し、その後、廃刊や休刊に追い込まれる中で「ナンバー」は40年以上も健在です。その理由は。

**松井** 一つは文藝春秋という会社が刊行しているス

「ナンバー」はなぜ続くのか?!

ポーツの雑誌であったこと。菊池寛の精神、人間という複雑怪奇な存在を良いところも悪いところも面白がるという精神が「文藝春秋」本誌や「週刊文春」と同様に「ナンバー」の中にも息づいている気がします。スポーツはルール内であれば、相手に1ミリでも1秒でも勝つためなら何をやってもいいという面があるでしょう。通常の仕事や社会の中では許されない……例えばサッカーの「マリーシア」やバレーボールの「フェイント」など、人間の狡猾さや汚さ、弱さを、その特権として浮き彫りにもしますよね。人間を丸裸にしてしまう。「ナンバー」にはそういう人間を面白がって雑誌をつくる点があります。

### 失敗から天国へ

——一瞬を切り取る写真を大事にしていますよね。

**松井** 私にとってベストのスポーツ写真と言えばこれです。14年ソチ冬季五輪総集編848号の浅田真

央さんの表紙です。

——解説して下さい。

**松井** ショートプログラムで3つのジャンプでミスをして16位。そして翌日のフリーではトリプルアクセル（3回転半）を含む8本の3回転ジャンプを見事に着氷。最高難度のプログラムを完璧に演じ切った直後の写真です。撮影したカメラマンは能登直氏。メイNSTAND側の抽選にもれて、バックスタンド側にいたそうで、演技の後に自分の方へ向かって歩いてくる瞬間にシャッターを切ったということです。この一枚には浅田真央さんの物語のすべてが凝縮していると思いました。どんなに言葉を使っても説明しても足りないスポーツの価値までも立ち上ってくるように感じます。

——松井さんご自身は夜中の編集部でショートプログラムの大失敗を見たのですか？

**松井** はい。失敗したときは浅田さん、もう人間じゃないような顔をされてましたよね。フリーで一

つ光になるものが見えて、彼女が人間として何か報われることがあればいい……と思っていました。

——スポーツは普通の人ならば表に出したくないような大失敗を、白日のもとに晒さらしてしまう誠に残酷な面があるのですが、この一枚は自らの力で天国に舞い戻ったようにも見えますね。

**松井** はい。浅田さんの引退特集号のときもこの写真を表紙にしました。ファンの方々からSNSで「またこれかよ」という声が上がっていました。

——もつと他にもあるのではないかと。という声も当然くるだろうと思っていましたか（笑い）。

**松井** 思っていました（笑い）。確信犯ですが、浅田真央はこれだろ！と揺るぎませんでした。

## 世の中とのキャッチボール

——雑誌刊行から40年を経ても変わらないポリシーがありますか。

**松井** 編集部集合的な無意識ではありますが、人

を面白がる気持ちは受け継がれています。

——雑誌が読者を獲得してゆく上で、どんなことを大切にしていますか。

**松井** 売れていないが、内容は凄い……はあり得ないです。世の中とキャッチボールをするために雑誌を出しているのですから、「売れてなんぼ」ではありませんが、売れないなら企画が合っていない、何かの設定が合わなかったからで、売れないのに内容は良かったは何の慰めにもならない。逆はあります。出来の悪い号なのに、タイミングがハマって売れることがある。手に取ってもらって「つまらない」はまだいいですが、読んでもらうためにつくって売れないはダメです。

## 2000年代で1位を記録

——特集するテーマによって売れる部数にバラつきが出ます。それについては？

**松井** 以前からそれはあります。最新のABC調査

「ナンバー」はなぜ続くのか?!

(2023年下半年期)では平均部数は6万部強です。部数にはメルクマール(指標)はありますが、去年のワールド・ベースボール・クラシック(WBC)のときは24万部売れました。今のところ2000年代では1位です。

——紙媒体の衰退が著しい中で今後をどうとらえていますか?

**松井** 現在、ナンバー局には4つの部署があります。紙媒体の雑誌「ナンバー」、ウェブ編集部「ナンバーウェブ」。2つは交流はありますが、基本的にオリジナルな記事を作成しています。3つ目が「プレミア事業部」で雑誌記事のサブスクリプションサービスに加えて、会員サービスとしてイベントや教室を開設しています。4つ目が「ブランドビジネス」で、昔で言う広告局の仕事です。「ナンバー」のコンテンツを違うカタチでスポンサーとコラボしたりしています。その4つをナンバー局で連結しているのですが、コロナ禍でスポーツイベントが開催

できない等の厳しい状況があったものの、今でも紙の「ナンバー」の売り上げが一番です。ただ先日、ある大学に呼ばれて、大学生に「ナンバー」という雑誌を知っていますか? と問いかけたところ、知っていると手を上げた学生は2割弱でした。

——2割弱? 厳しいですね。

**松井** ウェブで知って、紙の「ナンバー」を手にする人もいるだろうけど、非常に厳しいと思います。彼らにとつて活字情報は流れてゆくものでしかないのだと感じました。モノとして取っておき、傍らに置くものではないのです。だからこれからの時代はかつてのように部数10万部を取り戻すにはどうすればいいか? ではなく、Numberのブランド価値の源泉である紙媒体の「ナンバー」を他の3つの部署が新しい事業展開によって支えていく。そういう体制を構築していきたいと考えています。

——期待しています。

# 「走」 第11回



子供の心を持ち続けたピカソだけが描いた

「走る」絵

玉木正之

「廊下を走るな!」「階段を走っちゃダメ!」

小学生の頃は、誰もがよく先生に叱られた。いや、中学生になっても、まだ校内を走って叱られた人は多いだろう。子供の頃は、とにかくよく走ったものだ。が、歳を重ねて大人になるにつけて、誰も走らなくなる。いったい何故?

子供の頃は、授業が終わって運動場へ出るときも、運動場で鬼ごっこを始めるときも、友達とたわいなくふざけあつたりしたときも、とにかく楽しさを感じて走り出したものだ。

が、歳を重ねるにつれて、誰も走らなくなる。バスや電車に乗り遅れそうになったり、待ち合

わせ時間に遅れそうになったり、健康や減量のためにジョギングをしたり……、大人になると何か目的や理由がないと走らなくなるのだ。

子供時代に充溢<sup>じゅういつ</sup>していた遊び心が大人になると消えるのか?

有名な画家は誰もが大人だから、「ただ楽しく走る姿」を描いた名画は見当たらない。古代ギリシアの壺絵やギリシア神話の足の速い女神の絵は、競走している姿だし、何かに追われて走る姿など、「理由のある走る姿」ばかり。

そんななかで唯一の大作がピカソの『浜辺を走る二人の女』だ。

薄着姿の豊満な肉体の女性たちが、豊かな乳房や太い太股を惜しげもなく露わにして、青空の下、手を取り合い、大きく足を踏み出し、喜びに溢れ、意味なく力強く走っている。

見る人の心も清々しく高ぶるピカソ41歳の大作だ。きつとピカソは、大人になっても子供の頃の「遊び心」を失わなかったに違いない。



# 夢劇場『馬』

No.36



## 42歳の散華

長田渚左

この夏のパリ・オリンピックの総合馬術団体で、日本は銅メダルを獲得した。

それは92年ぶりのメダルで、1932年ロサンゼルス大会の障害飛越個人の西竹一以来と知り、本誌55号の特集『戦争とスポーツ』に掲載した彼の写真に手を合わせた。

92年前の同種目にはアメリカ、スウェーデン、メキシコ、日本の4カ国11人がエントリーした。

難コースに次々と失格者が出たが、アメリカのチェンバレンが減点12で完走。優勝かと思われたが、続く西が見事なタズナさばきで減点8で逆転勝利。西は10万人もの観客から拍手喝采を浴びた。優勝インタビューで、語学に長けた彼は「Won」（我々は勝った）と、愛馬ウラヌスとの人馬一体を語り、地元の新聞でも大きく扱われ、男爵の爵位を持っていたことから「バロン西」と

親しまれたという。

その13年後の1945年。アメリカ軍は硫黄島に上陸。西はその前年から陸軍戦車第26連隊長として激戦地に着任していた。

日本の敗戦は濃厚だった。西の最期は諸説あるが、そのうちの一つにはこんなエピソードが残っている。アメリカ軍は大爆撃の前に日本軍の中に西がいることを知り、こう呼びかけたという。

「バロン西、貴下はロサンゼルスで限りなき名誉を受けた。降伏は恥辱ではない。貴下を我々は尊敬をもって迎える」

その声が彼に届いたか否かは定かではなく、投降もなかった……というものだ。

彼は肌身離さず持っていた愛馬のたてがみとともに戦禍に散った。享年42。

今夏のパリでの表彰台は、西竹一の金メダル以来の栄誉だった。



## バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。申し込み住所が変更になりました。

〒168-0063  
杉並区和泉1-40-13-401  
スポーツネットワークジャパン  
『スポーツゴジラ』係

送料値上りのため、やむをえず変更いたします。

6冊まで 送料 5000円  
12冊まで 送料 10000円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

### 【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の冬号第65号は2025年1月

中旬刊行を予定しています。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館でお読みになれます。ご利用ください。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫  
●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館

●港区広尾・東京都立中央図書館

●千代田区永田町・国立国会図書館

●港区芝・東京都人権プラザ図書館

●新宿区霞ヶ丘・日本スポーツ協会資料室

### 【理事】

阿部雄輔／五十嵐二葉（弁護士）／池井優

（慶應義塾大学名誉教授）／岡田匡令（淑

徳大学名誉教授）／長田渚左（ノンフィク

ション作家）／笠原一也（日本オリンピック

ク・アカデミー名誉会長）／菊幸一（国

士館大学教授）／佐久間昇二（びあ株式会社

取締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相

談役）／永井憲一（法政大学名誉教授）／

森林貴彦（慶應義塾幼稚舎教諭）／山口香（筑

波大学教授）／山口良治（京都工学院高校ラ

グビー部総監督）

### 【事務局】

〒359-1192

埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15

早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じですか？

スポーツゴジラは年4回春・夏・  
秋・冬の季刊で発行。

都営地下鉄・大江戸線・浅草線・  
三田線・新宿線の各駅、全国の  
大学102カ所に設置されています。

スポーツゴジラ®

2024年10月10日発行

第1巻第64号

無断転載・転売を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・阿部雄輔・首藤正徳

波多野圭吾・西本祥子・江川卓実

山内亮治・鈴木希人

制作 有限会社ナトリック

印刷・製本 株式会社美松堂

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401